(東女医大誌　第51巻　第4号
頁　453～454　昭和56年4月)

〔学　　会〕

東京女子医科大学　第48回9外科合同カンファレンス抄録

日　時　昭和55年11月28日（金）
場　所　東京女子医科大学中央校舎会議室

1．漏斗胸の新しい1手術法

（形成外科）
野崎　幹弘・今村　芳子・佐々木健司・
芳松　信吾・林　　道義・平山　　峻

比較的高度の変形を伴う漏斗胸の治療には従来より種々の方法が行われてきた．われわれは陥凹した変形を直接矯正する根治手術として sterno-turnover 法を施行してきたが術後の多くの症例に2次的変形を来した．

そこで1978年8月より計62例変形部の turn-over に microsurgical technique を応用して生きた前胸廓の再建を計ることにより術後の2次的変形も極めて少なく，本疾患の矯正術としてほぼ満足する結果を得ることができたので報告した．本法は turn-over 後に内胸動静脈を吻合，切除ブロックを living tissue として revascularized させることから，たとえ陥凹部が偏位している症例においても変形部矯正を広範囲に求めることができるので殊に問題なくまた成人例はもちろんのこと成長期にある幼小児例に対しても適合した手術法ということができる．本法の術式の既略と術後の機能的臨床検査結果について述べた．

2．腸回転異常と輪状膵および脾腸管の遺残を合併した Preduodenal portal vein の1治験例

（外科）
山添　信幸・袴田　光治・馬渕　原吾・
倉光　秀麿・織畑　秀夫
（小児科）　浦本　恭子・山口規容子

生後3日目の女児で，主訴は胆汁性呕吐である．術前の上部消化管造影および注腸造影で腸回転異常が疑われ，手術を行なつた．開腹所見では180度回転型の腸回転異常があつたが，更に輪状膵も合併しており，その膵の表面から十二指腸の前面を通り肝に向かう太い血管が見出され，その走行からこの血管は Preduodenal portal vein と診断した．また下部小腸には脾と腸間膜とを結ぶ索状物が小腸をしめつけており，病理学的には血管，リンパ管を有することから mesodiverticular vascular band と呼ばれる脾腸管の遺残組織と思われた．

3．ホローファイバー人工肺による ECMO および局所潅流経験

（第2病院　循環器外科）
成味　　純・竹内　靖夫・辻　　隆之・
井上　健治・城間　賢二・吉川　哲夫・
小林　　洋・須磨　幸蔵

新しい膜素材としての多孔質ポリプロピレン糸を用いたホローファイバー型人工肺を従来の透析回路に組み込んだ簡便な潅流装置を考案し臨床応用を行なつた．

症例1　17歳　♂　右脛骨々肉腫症例で本装置を用いて抗癌剤の局所潅流を行なつた．本方法では操作が簡単でまた充填量も少く優れた方法と考えた．

症例2　4歳　♂　呼吸不全症例で7日間にわたつて本装置で ECMO を施行した．7日目に患者を失つたが酸素化，血液損傷はほぼ満足すべきものであつた．出血傾向，電解質平衡，等長期体外循環の際の問題点についても考察した．

4．抗血栓性高分子材料の分子設計とその評価

（心研理論外科）片岡　一則・桜井　靖久

抗血栓性材料は偽内膜形成型と平滑表面型に大別される．本研究では，多目的用途に使用可能な平滑表面型抗血栓性材料の開発を目的として，表面微細構造を制御した高分子材料を合成し，これらの高分子材料と血液との相互作用を，血栓形成の最も重要な因子である血小板の粘着および形態変化に注目して，カラム法を用いて検討した．その結果，材料の荷電，親疎水性，結晶構造などの量，分布状態（相分離構造）を変化させて血小板膜流動を制御し，それによつて血小板の粘着性および形態変化を制御しうることが判明した．

5．腎性骨症に対する副甲状腺亜全摘術について